



現代人形研通信

4号 2024年6月発行

目次

- ・現代人形研からのお知らせ
- ・インフォメーション
- ・活動報告
- ・展覧会レポート（月光社、山口景子、長谷川裕子）
- ・特別寄稿 京都での個展を終えて、思うこと
 - 井桁裕子（「肖像と月」井桁裕子展 Portrait and Moon）
- ・徒然コラム 羽関チエコ

特別寄稿

「京都での個展を終えて、思うこと」

井桁裕子

— 井桁裕子（「肖像と月」井桁裕子展 Portrait and Moon）

特集インタビューはこの通信最後部に掲載しております。



「肖像と月」井桁裕子展 会場 京都場 撮影 勺 禰子

現代人形研からのお知らせ

第1回 総会のお知らせ

当会が特定非営利法人として発足後、はじめての総会になります。正会員（個人・団体）の方は出席（欠席の方は委任状提出）をお願いいたします。今までと今後1年間の予算や活動の報告などを確認する重要な会議となります。

開催日 9月1日（日） 午後1時30分～午後5時

第1部（1:30～15:00） 総会

第2部 ゲストを迎えてのフリートーク（ゲスト未定）

会場 日比谷図書文化館 スタジオプラス（小ホール）

東京都千代田区日比谷公園 1-4

アクセス

東京メトロ 丸の内線・日比谷線「霞ヶ関駅」B2出口より徒歩約3分

都営地下鉄 三田線「内幸町駅」A7出口より徒歩約3分

東京メトロ 千代田線「霞ヶ関駅」C4出口より徒歩約3分

会場 URL <https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/space/hibiyastudio/>

※総会のお知らせは正会員の方には改めて郵送で通知いたします。出席できない方は委任状の提出をお願いいたします。

懇親会のご提案

8月31日（土）午後5時から 全会員（正会員・賛助会員）対象

参加希望者が10人を超えたら、開催します。飲食をしながら会員同士で自由なおしゃべりで交流を楽しむ会です。

会費は5000円くらい。会場は東京駅周辺（丸善丸の内本店ギャラリーでは「MISOROGI人形展」開催中）。開催希望される方は、こちらのアンケートフォームからお申し込みください。会員連絡用メールへのご連絡でも結構です。

<https://forms.gle/1GzeR4prjq6sRZDK6> 7月31日締切

Email member.gendainingyo@gmail.com

※希望者が7月31日の時点で10人に満たない場合は開催いたしません。

懇親会希望アンケート



会費年度更新と会費お支払方法のお知らせ

当会は7月1日に新年度が始まります。

新年度会費は7月26日までにお収めください。会員全員に更新のお知らせと郵便振替用紙を7月10日までにお届けします。

会費お支払い方法

当会は昨年10月発足時からクレジットカード払を前提に「会費ペイ」のシステムを導入しました。「会費ペイ」はコンビニ払いが入会時のみ可能ですが継続時は利用できません。また、クレジットカード払の希望者が少ないことから、新年度からは会費納入方法を次の2つの方法に限定することにいたしました。

① ゆうちょ銀行への送金

全会員に郵送する振込用紙をご利用いただくか、オンライン送金をお願いいたします。

② 会費ペイ

継続会費をクレジットカード払で希望する方のみ、継続してご利用ください。送金のご案内は会費ペイよりご連絡がメールで届きます。入会時に会費ペイをご利用で、ゆうちょ銀行への送金に切り替える方（クレジットカード払をしない方）は、お手数ですが事務局までご一報のうえ、ゆうちょ銀行にご送金ください。会費ペイでの登録を削除いたします。

※ GMO あおぞら銀行の口座は会費納入には今後使用しませんので、全員「ゆうちょ銀行」へのご送金をお願いいたします。

【現代人形研— CoNiCS（コニックス）展】出品者募集中

当会の会員のための自由な人形展です。会員であればお気軽にご参加ください。中華街での懇親会も計画しています。
来年は東京都美術館で全国公募展開催のため、CoNiCS 展は来年は開催いたしません。

会期 11月27日（水）～12月1日（日）

会場 横浜人形の家 多目的室

参加費 4000円（一人1点または1セットまで）

（委託料 片道1000円）

参加資格 当会会員（正会員・賛助会員）

定員 先着40名（審査なし）

申込開始 定員になり次第〆切

申込方法 下記の専用フォームからお申し込みください。

<https://forms.gle/HJuLaurQ5vDeyLE5A>

※本展は最終日がドールワールドアニマルフェスティバル開催日を重なるため、希望者には11月30日搬出に対応いたします。

現在までのお申込者

風らい坊、大八木ミノル、原田万紀、矢部藤子、一実、古城真理、高村とき枝、廣安瑞枝、ちしたかずよ、有田依句子、七衣紋、田中裕子、月乃光、アトリエ・シュガール、高村とき枝、成瀬麻里子、理事作品

ボランティアも同時募集（出品者も申込みできます）

会期中の受付と監視当番です。当会規定の交通費と謝礼をお支払いします。1日だけできる方でもどうぞ。詳しくは member.gendainingyo@gmail.com までお問い合わせください。

インフォメーション

MISOROGI 人形展

8月28日（水）～9月3日（火）

午前9時～午後9時（最終日は午後3時閉場）

丸の内オアゾ 丸善丸の内本店4F ギャラリーA

ドールアート展 2024 in うつくしま

第9回全国創作人形コンクール 出品者募集

展示期間 11月16日（土）～21日（木）

会場 MAX ふくしま4回 Aoz（アオウゼ）特設会場

福島県福島市曾根田町1-18

大賞（1名）30万円 準大賞（2名）10万円 入賞（10名）5万円

参加申込締切 8月31日 写真送付締切 10月20日

参加費 一次審査3000円 二次審査7000円（各1作品につき）

詳細は「大竹京創作人形教室エルプーペ」の公式サイトをご覧ください。（申込用紙請求受付開始 7月1日）

土井典評伝『愛玩拒否の人形作家 土井典』

7月に出版を予定していましたが、9月に延期しました。

お問い合わせ dfj-press@nonc.jp まで

活動報告

ドールアニマルワールドフェスティバルに出展しました。

6月15日に東京産業貿易センター浜松町館で開催されたドールアニマルワールドフェスティバルに出展いたしました。

理事の青の羊さんと羽関で会のご紹介をさせていただきました。イベント会場では入会受付が直接できます。



勉強会「横浜人形の家」人形展ガイドツアー＆懇親会（6月1日 横浜人形の家）

「ひとはなぜ”ひとがた”をつくるのか」「いざなぎ流のかみ・かたち ―祈りを込めたヒトガタたち―」それぞれの展示を企画の方に解説していただくガイドツアーに5人の会員の方が参加。2時間近く説明を聞きながら2つの展示を鑑賞しました。その後は希望者で中華街の飲茶で懇親会をしました。



出品作品を解説する横浜人形の家の方 長尾千斗さん



いざなぎ流のヒトガタの展開図と制作手順

参加者のご感想

M.W さん

埴輪から創作人形まで広いジャンルのヒトガタを一同に観られて良かったです。一番嬉しかったのは土井典さんの作品をまとめて観られたことでした。

民間信仰に使われた紙人形の「御幣」は今まで知らなかった世界で、これを人形というのなら目と口に見えるものすべてが人形なのだと思います。多くの集客が望める企画ではないかもしれませんが、商業的な展覧会にならずに横浜人形の家ならではのコアな展示をこれからも観てみたいです。

maru さん

展示企画された学芸員の方が説明し、また質問に答えて頂き、見どころも分かり短時間でも鑑賞がとても楽しく出来ました。

私は人形について不勉強で、作るものも羊毛フェルトの謎生き物です。ドールの作家さんとの懇親会に不安がありましたが、制作過程の話を伺い驚いたり (iPadのアプリを使って3Dプリンターで人形の頭を作る！想像してたイメージと違いました！)、話はとても興味深く、こういった機会を設けて頂けて有意義であったと思います。最初は緊張しましたが、楽しく美味しいツアーでありました。ありがとうございました。

大八木ミノルさん

「ひとはなぜ”ひとがた”をつくるのか」展は、なぜ「ひとがたを作るのか」というのは普段自分が自問していることでもあるので、興味津々でした。入り口すぐに土偶が展示してあり、縄文好きとしては心が躍りました。何万年も前から、ヒトはヒトガタを作ってきたのです。また、いざなぎ流のヒトガタは、聞くのも見るのも初めてでした。現代日本で目に見えないモノをヒトガタとしてこの世に「降ろし」祈る行為が連綿と続けられ、生活の一部になっているとは本当に驚きでした。

勉強会が終わって懇親会でいろいろな話が出たのですが、なぜ自分が人形を作るのかというようなテーマを他の作家さまから聞いたのがとても良かったです。普段家にこもって作業しがちな私にとって、勉強会でもなければ今回の展示に触れることはなかったはずで、今回の企画には感謝しかありません。

展覧会レポート

◎月光社展 「覇権の国のアリス」

5月12日～5月21日 Zaroff（東京・初台）

月光社の展示は物語でいっぱいだ。小さな空間に大小の小さな土人形がぎっしりと並び、おとぎ話のような世界をつくっている。

今年の岡本太郎現代芸術賞で特別賞を受賞してから最初の個展なので、なにか変化を感じたかというそういうわけでもなく、どちらかという物語を語る小人たちの数とパワーが増したというべきか。その世界をガリバーのように見守る月光社のつじとしゆきさんに、ひとつひとつの人形の意味を説明していただく。彼の土人形は無言で情緒を醸し出すような類のものとは違い（そういう土人形のフリもできるが）、凝ったコンセプトが隠されている。それは説明を聞かねばわからない。それぞれの作品の意図を知り、丁寧に鑑賞するには長い時間が必要になる。

今回は権力者の社会をアリスの世界で表現した。1989年に中国の北京で起きた天安門事件をモチーフにした作品群では、毛沢東のマオイズムに中国語の猫（マオ）をかけて、毛沢東語録を背負った猫たち（マオイスト）が人民を弾圧する。チェシャ猫のように巨大化した猫が昼寝する紫禁城は重さに耐えきれず崩れ始める。

中国でも人気のスターバックスのマークに中国共産党のマークをかぶせ、人魚の代わりに中国建国の象徴である蛇身人首の女媧（じょか）を配す。歴史や民話が入り乱れたカオスを描く人形たちのひとつひとつは、それぞれに美しい色を帯びた絵のような趣がある。

そのあとで、近くのオペラシティアートギャラリーで宇野亜喜良展を鑑賞したのだが、芸術作品として構えない姿勢、おびただしい制作数。平面においても立体においても自在な表現と技術。核にあるのは、ほんのりと色気を香らせる魅惑的な少女たち。それぞれに風刺や言葉遊びが含まれていて、それらの特徴が実は、今みてきた月光社の制作にも共通しているのではないかと考えた。TARO 賞の受賞をきっかけに、人形によって彼だけが取り組んでいる表現に気づく人が増えてほしいと願っている。

（羽関）



山口景子 人形展 「遠い日の記憶」

5月14日～5月19日 ノリタケの森ギャラリー(名古屋市)

名古屋で開催する個展が70歳の節目の年となった。古希の数にちなみ、初期の人形から最新作までの70点を俯瞰する展示構成にした。学生時代を含め初期の作品を見られる機会はほとんどない。年代別に当時の状況の説明に沿って鑑賞できるので、貴重な展示である。主な素材は布だが、「違うことをやりたがる」ことから生まれた陶作品や、画家である夫の山口力靖氏さんとのコラボレーション作品は、山口作品が醸し出す異世界をさらに深く広く拡張する。

景子さんは多摩美術大学絵画科在学中より人形制作をはじめた。1981年から東京で個展を4回開催の後、1985年から夫と渡米し1993年までアメリカに在住。ニューヨークのギャラリーを中心にアメリカで作品を発表した。静謐な空気を作りたいという景子さんの造形は舞踏やダンスにインスピレーションを受けており、古布を絵の具に、針を筆として作り上げる独創性の豊かな人形は、アメリカの工芸誌でもとりあげられた。

帰国以降、日本で個展やグループ展で作品を発表。名古屋に転居してからノリタケの森ギャラリーで個展を開催するようになり、同会場では今回が4回目。日本では早くから創作人形作家のあいだでは評価が高かった。海外で展示をすれば必ず関係者の注目を集める。伝統工芸会以降の創作人形が少しずつ評価を得て公立美術館にも収蔵されるようになってきているが、この作家の作品を公的に収蔵しようとする動きがいまだにないのは大変残念なことだ。人形が持ちうる不思議な魅力に富んだ山口作品を、いつでも誰でも見られるようであってほしいと願うのは筆者だけではないと思っている。

(羽関)



「遠い星の声」(23年)



「踊り子」(83年 未発表) 樹脂で制作したのはこの1点のみ



夫の力靖さんとのコラボレーション作品の前で

長谷川裕子展 「まなざしの向こう側」

5月27日～6月2日 柴田悦子画廊（東京・銀座）

前号の徒然コラムの長谷川裕子さんの寄稿をお読みいただいた方には、今回の個展会場である柴田悦子画廊と長谷川さんの出会いのいきさつはご承知と思う。作品を発表する場を求めて日本橋、銀座のギャラリーを端から端へと人形を見せて歩き、門前払いのような扱いをいたるところで受けても行脚を続け、日本画を扱う柴田悦子画廊と出会う。そのギャラリーで制作40周年を記念して12cmの小さな作品から54cmの大きな作品まで16体を展示した。作品には「翠」「葉月」「楓」「セーラボーイ」など、季節の折々にちなんだタイトルがつけられ、人形からはそれぞれの季節の空気を感じられるようだ。

粘土で制作する時期もあったが、手にとって抱きしめたいような人形にしたいと、独学で木彫をはじめ2000年からは桂の木で関節人形を制作している。人形がつける衣装もニットもすべて手作り。ドイツの木彫の創作人形作家エリザベス・ポングラッツが人形は子供にもたせるものだからと、衣装となる素材には薬品処理を施さないオーガニックの素材にこだわった姿勢に通じている。

純粹、繊細かつ大胆、そして強さと優しさをあわせもつ長谷川さんに育まれた人形は、どんな子供にもあるような「切なさやもどかしさ」を醸しつつ、しっかりと立ってまっすぐ前を見つめている。（羽関）



特別寄稿

「京都での個展を終えて、思うこと」

井桁裕子

— 井桁裕子（「肖像と月」井桁裕子展 Portrait and Moon）

撮影 勺 禰子

4月27日から6月9日まで、京都・二条のギャラリー「京都場」にて「肖像と月」井桁裕子展 Portrait and Moon と題して個展が行われました。

会場の「京都場」は、京都らしい風情の町屋の中にあり、反物の引き染めの工場だった味わい深い建物をリノベーションして利用しています。木造の梁が美しく、照明は博物館で使う本格的なものが設置されています。

この展示は、川崎市岡本太郎美術館の学芸員を設立時から務めた仲野泰生氏の推薦で「京都場」運営委員会によって開催されました。この素晴らしい空間での展示を、多くの方に観ていただけて感謝しています。



展示は肖像作品《闘病日誌—音楽家・金田真一の肖像人形》、《升形山の鬼—舞踏家・吉本大輔の肖像》、《片脚で立つ森田かずよの肖像》、《未完成（篠原勝之氏をモデルにした作品）》の4点を中心に、焼き物の小品が23点という内容になった。

肖像作品は私のライフワークと言えるもので、始まりは1996年制作の《セルフポートレートドール》だった。それは自分自身の存在を受け入れられない葛藤を客観視する必要から制作したものだった。

解剖図と実際の身体を比較しながら造形する時間の中で、単に解剖学的な事実にとどまらない発見があった。

精神面では死に向かう思考に取り憑かれて彷徨う状態でも、身体では精妙な生きる営みが続いていく。人間は必ず朽ちていく運命にあるが、その限られた時間の中で身体は物質的な代謝を続け、変化していく。セルフポートレートを作る中で生命のひたむきさを掴んだ。

しかし「自分の身体も、他のあらゆる生命体と同じように美しい存在なのだと知った」という内省的な発見は作品だけでは伝えにくかった。プライベートなことまで言葉を尽くして説明するしかなく、ここで言葉が足りないと「自分は不細工だと思っていたが案外そうでもなかった」という程度の表面的な話に聞こえてしまうのが難点だった。

セルフポートレートのあとに続く作品では舞踏家にモデルになっていただいたので、一般的にいう「美しさ」の規範に逆らうものではなかった。しかし重度障害者でありながらダンサー・俳優として活躍する森田かずよさんの肖像では、健常者ではない身体の美しさを表現したことで、女性の身体のイメージの消費的な再生産が連綿と続いてきた歴史に一石を投じることができたと思っている。この作品にはいくつかの社会的な意味が生まれ、それは制作中には思いつかないことだった。

普通にいう「人形」の創作は理想的な愛玩物を作る行為であって、それ以外の表現を目的にはしない。普通は、人が魅力を感じる範囲を超えない程度で表現を模索するということだと思う。ところで、私が自分の作品を芸術だと思って制作しつつ「人形」と呼びたいのは、人間は美しいということを前提にして自分なりに理想を求めて造形を行っているからだ。

芸術表現は、常に実験精神を持って新領域に踏み込むことだといえよう。しかしこの場合はヒトガタなのである。人形で「表現」を試みるとき、それはどこかに残酷さが漂う。人形は痛みを感じることもない他者の身体なのだ。それが軽度のものであれば滑稽さを感じさせるし、身体や顔をむやみに変形した造形は暴力的な欠損を思わせ、恐怖の領域に突進してしまうだろう。芸術表現という行いと、「人形」というあり方はこうして矛盾する。

「肖像と月」というタイトルは、こうした違うベクトルがあると言いたいのがあった。

占星術では「月」は無意識に埋もれた部分、過去の記憶などを意味し、意識的な個人の力を象徴する「太陽」と対を成すとされている。そこで、意識的に制作する肖像作品を「太陽」になぞらえ、焼き物で作る小さな人形造形や球体関節人形などを「月」として象徴させたのがあった。痛みも尊厳もないからっぽの身体である「人形」は、個人の名前を持った「肖像」となることで、守るべき尊厳を獲得する。身体は、個人として名前を持ち認識されることが、人間として尊厳を保つことの出発点になるのだから。

今回の展示は、自分の制作がそもそも持っている矛盾を含めた到達点だったと思う。

分裂したままもう少し先に進んでいこうと思っています。



天王星



手前 未完成（篠原勝之氏をモデルにした作品） 奥 升形山の鬼ー舞蹈家・吉本大輔の肖像



未完成（篠原勝之氏をモデルにした作品）



人新世の天使

徒然コラム

29 年前、同じ場所で

羽関チエコ

前号の特集で紹介させていただいた横浜人形の家の「ひとはなぜひとがたをつくるのか」展は、個人的に感慨を覚えるものがありました。

私が1994年に『DOLL FORUM JAPAN』を発行した当時、創作人形の資料を求めて横浜人形の家（以下「人形の家」と記載）や国立近代美術館工芸館などに問い合わせをしたのですが、両館ともに現代の人形作品は評価が定まっていないことなどを理由に資料収集や保管に取り組む姿勢が見られませんでした。人形の家では例外的に当時貸出をしていた展示室で行われる公募展や教室展などで、一時的に同時代の創作人形を見る機会がありました。常設では当時活躍されていた島村龍児さんが寄贈した「赤いくつの女の子」のみが展示され、それは今でも常設展会場の入口に飾られています。長いあいだ、それだけでした。

当時、私は人形の家を拠点に活動していた専門家や関係者が集まる研究団体に入会したのですが、その企画部会で1995年の総会で現代の創作人形について発表をするとともに展示を計画してほしいと依頼されました。この団体には創作人形を専門とする人はほとんどいなかったため、今よりずっと若かった私は張り切って準備を始めました。企画書には、固定ポーズから球体関節人形、オブジェドールなどを盛り込み、創作人形にはこれだけの表現手段があるという自由さと面白さを紹介したいと考えていました。

しかし、企画書が毎月開催される上層部の会議でなかなか通りません。理由は、球体関節人形に対する強い拒否反応でした。当時勢いついてきた球体関節人形では、退廃やエロティックな表現がブームとなり、それまでの伝統的な創作人形観を持つ人達の許容範囲を超えていました。私は、現代の作り手たちがそういうものを作っているのだから、好き嫌いではなく現代を人形を通して観察する意味でも展示の意義はあると譲りませんでした。結果、団体のプログラムは2部構成となり、私の担当部分は2部に回されました。展示も人形の家ではなく、隣接する施設のホールで開催することになりました。聞いた話では、2部が始まる前に閉会宣言をしようという声もあったとか。

横浜人形の家の事業主体は横浜市であり、性格は研究施設というより観光施設です。裸に近い表現が一般的にはクレームの原因となりうることを恐れたとも考えられます。30年たって少し大人になった身としては理解ができる気もします。

だから、4月6日から6月30日まで開催された「ひとはなぜひとがたをつくるのか」展で、ある意味全裸に近い土井典作品がメインビジュアルになると知ったとき、文字通り老婆心で心配しました。29年前では考えられなかったことです。人形の家は管理運営が変遷してきており、現在は全国の公共施設のように横浜市から運営を任された指定管理者が運営していますが、担当されているスタッフの方が人形に対する思いが深く、これまでにないような企画にも挑戦されています。指定管理者制度は批判されることもありますが、やる気のある人材にたどり着けるのであれば、歓迎すべき側面もあると思います。

29年前に2部制に仕切られながらパネルディスカッションを行ったのと同じ会場で、6月22日に私は「ひとはなぜひとがたをつくるのか」展のトークイベントで、『夜想』の編集デザインで知られるミルキィ・イソベさんや当会理事でもある榊山裕子さんと登壇し、土井典さんについて語らせていただきました。かつて土井さんが制作した貞操帯をつけて踊ったことのある暗黒舞踏の小林嵯峨さんのミニ公演もありました。隔世の感があるとはこのことだと思いました。

参考までに、1995年8月発行の『DOLL FORUM JAPAN』6号p7のページを掲載します。当時の作家作品の画像をスライドで見せた後に、四谷シモンさんが発したコメントは痛恨の一撃でした。現在の状況にも響く言葉だと思います。29年前の記事ですが、ご覧いただければ幸いです。（記事中では私は司会の「小川」と表記されています。）

日本人形玩具学会 公開シンポジウム

人形の国のアーティスト

6月18日 横浜人形の家

去る6月17日と18日に、横浜人形の家において、日本人形玩具学会の大会をかねた公開行事が開催された。17日にはメイ・テーマに基づき、人形研究において著名な北村哲郎氏による基調講演、人間国宝の市橋としこさん、TV人形劇「平家物語」制作の川本喜八郎氏による対談が行われた。

渡辺純子(人形美術研究家・エス・タブリユー・ジャパン代表) 本日の芸術とはエネルギーを循環させるメディアであると考えます。そのような芸術は人間までも変えるような不思議な力を持っています。人形が芸術になり得るか、ということですが、人形もオブジェであり、この意味で宇宙のエネルギーを循環させるメディアであれば、ジャンルを問わず、アートになるのです。人形は作った側だけでなく、所有する人からも魂Ⅱエネルギーが注ぎ込まれ循環する特殊なメディアということができます。

工芸というところで、人形が用の美、ということに限定されてしまおうと、そうじゃないんですね。美術にはいつちやうんですね。工芸、というよりも、絵画とか彫刻とか、鑑賞的なものなのでそういったものに入ってしまうんですが、じゃあ、絵とか彫刻と同じか、というと、ちよつと違うんですね。じゃあ



工芸というのは磨き上げられた技術の冴えを土台にしていなければ工芸の中に入らないのじゃないかと思えます。他の分野の方などは非常に技術の鍛錬の後の作品を出してらっしゃいます。そこへいくと、それに対抗するには伝統的な技をある程度ふまえた上の作品でありたいと思っています。

関原紫光(京人形師) 私の父は、ああいいう人形(伝統的な京人形)しか作れないんです。桐の木を削って針金を通して、綿を巻いて、昔の着物を素材にして、ああいいう人形が好きで好きで、こういうやり方でこういう人形を作るのが好きで仕方がないんです。作るたびにものついているものというのを求めていると思います。そういう生き方のような気がします。素材とか、本質的にはその人自身の問題と思えます。伝統だからあかんのや、創作やからあかんのや、という気持ちではなくて、お互いを受け入れる気持ちでやっていったら、もつとこういう人形の世界は、楽しくなるんじゃないかという気がします。

福島弘太郎(人形作家) 私個人としては、人形自体の芸術性としては、あまり興味がわかない事なんですけれど、一番納得がいくなのは、人形って「物」なんですね。創作もの、著しい欠点というのは、百ある器の容量を百まで全部だして、もう、あるいはそれを越えて作る側がメッセージを伝えようと必要以上にエネルギーを込めすぎたり。自分自身も含めて、創作人形というのは自分自身に甘い部分があるんですよ。表現的ではあるけど、独りよがりであつたりとか、買つてくださるお客様に対しての価格的問題であるとか。

現代人形研通信 4号 2024年6月28日発行

特定非営利活動法人 現代人形文化研究会

189-0003 東京都東村山市久米川町3丁目27-57 TEL 042-395-7547(ノックブラツツ内) 会員連絡用 Email member.gendainingyo@gmail.com

本ページの画像や記事の無断転載を禁じます。©2024 NPO GENDAININGYOBUNKAKENKYUKAI